柳 宗悦
―民芸を創始し、日本の民芸運動をリードした先駆者―

志村 和次郎
（ノンフィクション作家 1961年大学法学部卒業）

●柳宗悦の同志社赴任

民衆的工芸をとらえて「民芸」という語をつくり、その概念を広めた民芸学者であり、思想家でもある柳宗悦は関東大震災以降、1924（大正13）年から京都へ移り住みました。同じ『白樺』仲間の志賀直哉（1年前から京都、粟田口三条坊へ居住）から誘いがあったのと、兼子夫人が心配していた収入の道も、かねてから親しい能勢克男による同志社教職への斡旋の尽力があり、京都への移住を決断します。柳宗悦の上洛のきっかけを作った能勢克男は東京帝国大学法学部を卒業して、同志社大学法学部で教鞭をとり、「同志社アカデミズム」を形成した進歩的学者グループに所属していました。

能勢は後に、昭和4年学内の対立から、同志社を辞し、弁護士として活躍するとともに、京都家庭消費組合設立に力を尽くし、戦後も京都生協の初代理事長になるなど、生協の生みの親として有名です。柳兼子夫人は後に、京都での10年の生活を振り返り、最初の頃の能勢克男の協力がなかったら京都の生活は始まらなかったと言っています。

柳宗悦は大正14年4月、同志社女学校専門学部で英文学、英詩を教える講師となり、間もなく同志社大学の文学部の講師も兼ねることになります。

同志社時代の柳宗悦

こうして、柳宗悦夫妻の生活基盤は固まり、京都生活が始まります。住いは宗悦の学習院時代の同級生で、清閑寺侍従の口利きにより、小西という人の持家で、場所は黒谷の真如堂や法然院が近く、眺望の良い家でした。

宗悦教授を囲んで（1927・昭和2年）

女専では当時、松田道が校長でしたが、宗悦の英文学・英詩の授業が加わり、上田敏、厨川白村、松本亦太郎など、英文科の教授陣は多士済々で充実していました。また、柳は文学部英文学科の講師としては、「ウィリアム・ブレイク」「ヴァルト・ホイットマン」、キリスト教神秘思想などを教え、名講義だったといいます。

講義は教科書に沿った無味乾燥なものではなく、エックハルトの神秘思想の中で、中世の修道女の話、禅や親鸞の話など入るという具合で、授業は誠に人気が高く、当時の学生だった西郷辰三郎（『うつくしい話』の著者）は「先生の話から『物』の美しさと『心』の美しさの一致を感得し、直観の修練をするのに役立った」といっています。

また、柳は能勢克男の依頼で法学部の教授たちとの交流の機会を持ち、宗教哲学の話で、「永遠の今」というテーマで話をしています。そして法理学の恒藤恭や社会的キリスト教の中島重、それに今中次麿などと熱心に議論しています。

●M・F・デントンと柳宗悦夫妻の交流

柳が同志社で教鞭をとる労をとったのは能勢ですが、能勢の紹介で出会ったデントンとの親しき交流がその後の柳に少なからず影響を与えることになります。

デントンは専門学部に入学した生徒達に、柳のことを、〝He is a great teacher〟と紹介したといいます。デントンは東洋美術、陶磁、茶文化などに深い理解を持っていたことから、柳夫妻に親近感を持ったようです。

デントンの推薦もあり、声楽家の兼子夫人も同志社女史専門学校で教鞭をとることが決まりました。また、柳宗悦が同志社大学で講義を始めたのは、時の文学部長大塚節治の推薦となっていますが、

中央左・デントン、右・柳宗悦　デントンハウスにて

実際はデントンの根回しと口利きで実現したものです。

当時、デントンの居宅であるデントン・ハウスにはデントンが自ら招待する客の他、デントンを目ざして京都を訪れる外国人が多く、さながら同志社の迎賓館のようだったといいます。まさに民間外交官の役割を果たしていました。デントンは来客の接待で、必ずと言ってもいいほど、自分が集めた民芸の皿や鉢にご自慢の西洋料理を盛り付け、招待客を喜ばせる演出は見事なものでした。そして、同志社にとっても重要な賓客がある場合は、デントンはしばしば柳夫妻を同席させたようです。柳はデントンの依頼で来客へのスピーチを気安く応じた他、伊万里・九谷・柿右衛門などの古い陶磁器、柳のすすめで集めた朝鮮の白磁や、新旧の日本の名画や版画、絵巻物などの積極的な説明役をかってでたりしました。

こうしたデントン・ハウスでの内外の著名な人々との会合は、柳夫妻にとっても楽しいもので、これらの美術、工芸、民芸品を紹介するのが、恒例となったようです。

また、デントンとも親しい、ラングドン・ウォーナーと柳宗悦との出会いもデントン・ハウスでした。柳は昭和4年、同志社を辞した後、ウォーナーの依頼で渡米し、ハーバード大学のフォッグ・ミュージアムで「東洋美術の美しさ」について講義しています。

このように、柳宗悦にとって、デントンハウスでの気脈の通じ合った、親しい交際と多くの賓客との交遊は、柳が民芸活動を積極化させるきっかけにもなりました。デントンとの深き縁を感じます。

●朝鮮・李朝陶磁の永遠の伝達者

さて、柳宗悦という人物をよく知るためには、話を少し前へ戻して、柳宗悦の京都に来る前の「朝鮮民族美術館」の設立の過程を知る必要があります。朝鮮白磁の美しさを世の中に紹介したのは柳宗悦です。大正3年、柳は朝鮮で小学校教諭をしていた淺川伯教からお土産にもらった白磁の「染付秋草文面取壷」に心を奪われました。柳は「それは磁器に現はされた型状美だ。之は朝鮮の陶器から暗示を得た新しい驚愕だ。（中略）その冷な土器に、人間の温み、高貴、壮厳を読み得ようとは昨日迄夢みだにしなかった」と『白樺』の誌上に書きました。朝鮮の陶磁器の美しさに気づき、それが「用の美」という言葉に表され、後の民芸思想、民芸運動のきっかけとなったわけです。さらに、淺川巧の蒐集の辰砂と呉州で連華を描いた李朝大壺に対面し、これまで経験したことのない感銘を受けました。宗悦はこの壺について「尽きることない冥想の美が茲には恐ろしい迄に示されている」と言い、李朝の作で、永遠のものの一つで、宗教の域に達しえた器と讃えています。

柳宗悦引率による朝鮮修学旅行

この壺が動機となり、李朝の作品の無益な散逸を防ぐため、博物館設置の願望をいだき、大正10年に『白樺』に「朝鮮民族美術館の設立に就て」を発表しました。そして、大正13年、ついに、浅川兄弟の協力を得て、景福宮神武門外にある観豊楼に朝鮮民族美術館を開館させます。

これより先11年に、柳は、日本の殖民政策を推進する朝鮮総督府が、景福宮の光化門を破壊する方針に反対し「失われんとする一朝鮮建築のために」という論陣を張り、取り壊しを阻止するのに成功しました。このように、柳宗悦は朝鮮文化の保存と維持に貢献したばかりでな

宗悦、河井寛次郎、浜田庄司の3人が高野山へ旅し、西南院の一室で、「日本民芸美術館」設立の計画を立てたのが第一歩です。

柳はそれまでに、後述する李朝の陶磁に深い愛情と理解を示して、京城に「朝鮮民族美術館」を開設していますし、木喰五行上人の木彫仏への執着から民芸運動のまぎれもない前奏曲といえます。民芸思想とは、一言で説明するのは難しいのですが、これまで美術に劣るとしてかえりみられなかった工芸品に価値や美しさを認めようというものでした。

そして、柳宗悦は昭和元年、雑誌『工芸』を創刊して、120号まで刊行された。翌昭和2年の4月からは、『大調和』に「工芸の道」が連載され、6月には東京の鳩居堂で第1回の民芸展が開催され、また理論を実践に移すため、上加茂民芸協団が結成され、伝統的な手工業の保存と育成という面で、民芸運動を支えるものになりました。

やがて、京都における柳の仲間は次第に増え、木喰微笑仏や李朝の白磁や陶磁器、雑器などから永遠の生命や美を直観

熱の入った講義には、女専の生徒達は悉く感銘を受けたと当時の同行した学生は述懐しています。3回目の昭和5年の旅行では、同志社女専の卒業生である淵沢能意の設立した淑明普通学校に表敬訪問しています。

この修学旅行は柳夫妻の引率がなければ、実現し難いものであり、参加した学生たちにとっては二度とない意義あるものになりました。同志社女子部における柳夫妻の業績の中で特筆すべきできごとであり、女子大史に残る不朽の功績となりました。

●民芸の創始と民芸運動のはじまり

柳宗悦は同志社で教鞭に立ちながら、一方で時間を見つけて、壇王さん（壇王法林寺の市、毎月29日）、弘法さん（東寺の市、毎月21日）、天神さん（北野天神社の市、毎月25日）へ行き、下手もの、民芸品を蒐集していました。駒場の日本民芸館に、その時の目ぼしい物がかなり、存在するのは注目に価します。

日本の民芸運動は、大正15年1月、柳

く、当時抑圧された朝鮮の人たちに同情を寄せた一人でした。

●柳宗悦夫妻の引率による朝鮮修学旅行

その後、柳宗悦・兼子夫妻は揃って、同志社で教鞭に立ちますが、朝鮮を愛していたこともあり、夫妻の肝入りで、朝鮮修学旅行を行うことになりました。

宮澤正典同志社女子大名誉教授の「同志社女学校と朝鮮」の資料によりますと、昭和2年、3年、5年の3回実施し、最初の昭和2年は朝鮮民族美術館主催の展覧会への招待も行われましたが、同時に兼子夫人の独唱会と学生による演奏会を京城で開催しています。

10月10日の現地紙『東亜日報』には盛大な開催と兼子夫人の絶大な人気と64名の学生の大合唱を称える記事が掲載されています。

翌、昭和3年の修学旅行は満州まで足をのばし、柳は京城で、学生たちを朝鮮民族博物館のある緝敬堂に案内しています。朝鮮文化を目のあたりにしての柳の

した人たちには、デントンだけでなく、英文学の寿岳文章、牧師の外村吉之助、木工漆器の黒田辰秋らがいました。また、当時、京大教授であり、後に同志社の総長、国際基督教大学の初代総長となる湯浅八郎も柳の影響を受けた一人でした。湯浅は昭和4年に京都三条で開催された柳と知り合い、以来、柳の民芸道の世界にのめり込んだ一人です。後に、京都民芸協会会長を務めるほど東洋文化の精華として、民芸を愛し、そして全国各地から収集にも熱を入れ、彼の集めた民芸品は現在、東京三鷹のICUキャンパス内にある湯浅八郎記念館に常設、展示されています。

柳は京都以外にも多くの友や弟子を持っていましたが、就中、益子の浜田庄司、静岡の芹沢銈介、市川の式場隆三郎、青森の棟方志功たちも、京都の民芸運動に一時加わっています。柳らによる民芸運動は、今まで無視されていた美の発見と日本文化の高揚につくした貢献は誠に大きいものがあります。

なお、同志社で柳宗悦を敬愛し、その理論に傾注し、民芸運動を全て捧げるこ

とを決意した人物に村岡景夫がいます。村岡は同志社大学哲学科の教授を辞し、日本民芸協会の初代専務理事として東京へ移住し、柳宗悦を支えることになります。

●同志社女学校に音楽で貢献した兼子夫人

兼子の同志社時代において特筆すべきことのひとつは、本格的混声合唱団創設に貢献したことです。柳兼子は声学家として有能なばかりか、指導力にも秀れていました。大正14年には、同志社女専、大学のグリークラブの学生たちによる同志社混声合唱団を誕生させています。

その年の同志社イヴ、同志社創立五十周年記念音楽会には、こうして誕生したばかりの同志社混声合唱団が、兼子夫人の指揮でヘンデルの「ハレルヤ・コーラス」を熱演しました。

日本では初めての女性指揮者であり、また日本では最初に組織された学生による混声合唱団であったのです。海老名総長をはじめ、速水予科長、松田道女専校

柳兼子

長等も、この合唱を聴いて驚き、高く評価しました。

当時の兼子は夫の宗悦の民芸運動の高まりから訪問客も跡を絶たず、その接待や子供たちの養育、そして自らの声楽教育と類稀な活躍でした。

息子の柳宗理は後に「父の民芸運動は、母の援助なくしてはあり得ず、母の芸術は父の協力なくしては、今日に至らなかった」といっています。柳兼子は夫に従い、昭和8年、京都を去って東京小石川へ転居しました。その後も自由学園や国立音楽大学の教授を勤め、音楽界に貢献しました。その功労が認められ、兼子は紫綬褒章の他、昭和40年に芸術院恩賜賞を受け、昭和47年には、声楽界ではただ一人の日本芸術院会員にも選ばれました。

同志社混声合唱団（和服で指揮する柳兼子）

いままで述べてきましたように、柳宗悦・兼子夫妻の同志社への貢献は浅からぬものがあり、その思想、考え方に強く影響を受けた後進の人脈も少なくありません。

また、柳宗悦は同志社在任、京都にいた10年間で民芸運動が確立されたと考えていいと思います。宗悦はこの10年間、全国各地を旅して、民衆によって産みだされ、埋もれていた民芸品を再評価したり、沖縄やアイヌの工芸品などにも注目し、その擁護につとめました。そして、これらの民芸振興の行動を精力的に行うとともに、10冊を超える名著を出し、仲間たちによって、京都を初め各地に民芸協会ができたわけです。

次第に民芸運動は全国へと広がりを見せ始めた昭和８年５月、柳夫妻は東京へ去り、そして、昭和11年，東京駒場に大原孫三郎の助力を得て「日本民芸館」を創設し、彼の事業は最終章を迎えることになります。『柳宗悦選集』10巻のほか数多くの名著があり、昭和32年には文化功労者に選ばれました。

参考文献

・寿岳文章『柳宗悦と共に』
集英社（１９８０）

・能勢克男『日本人の生活と芸術』
郷土書房（１９４８）

・西郷辰三郎『うつくしい話』
芸艸堂（１９８５）

・宮澤正典『同志社女学校と朝鮮』
同志社談叢17号（１９９７）

・尾比呂志『評伝柳宗悦』
筑摩書房（２００４）

※掲載写真は同志社女子大学史料室所蔵

柳　　宗　悦（やなぎ・むねよし）
1889.3.21～1961.5.3

思想家、民芸運動創始者。1889（明治22）年東京生まれ。1913（大正2）年東京帝国大学文学部卒。1910（明治43）年学習院高等学科時代に『白樺』創刊に参加。1936（昭和11）年日本民藝館を設立、初代館長に就任。1957年文化功労者。1924年同志社女専教授、1925～1929年大学英文科講師。
論文に「木喰（もくじき）上人の研究」（『木喰五行研究会』、1925年）、著書に『工藝の道』（ぐろりあそさえて、1928年）、『美と工藝』（建設社、1934年）、『蒐集物語』（中央公論社、1956年）、『民藝四十年』（宝文館、1960年）ほか多数。『柳宗悦全集』全22巻（筑摩書房、1980 ～1992年）がある。